

トルクメン語の音調素描*

福盛 貴弘†

キーワード：トルクメン語、アクセント、イントネーション、音調

1 序

トルクメン語は、トルクメニスタンにおける公用語の1つであり、系統的にはトルコ諸語オグズ語群に属する。トルクメニスタンは、西はカスピ海、北はカザフスタン共和国、ウズベキスタン共和国に接し、南はイラン・イスラム共和国、アフガニスタン・イスラム共和国に接し、首都アシガバードは北緯 37.98 度、東経 58.35 度にある。

トルコ諸語のアクセントについては、語末にストレスがある固定アクセントで音韻論的には無アクセント言語というのが広く知られている¹。しかし、トルコ語においては、Demircan (1975)、Sezer (1981)、Inkelas (1999)、福盛 (2010, 2013) など例外アクセント、すなわち語末アクセントではない語彙の規則性が示されており、福盛 (2010) では竹内 (1996) の見出し語のうち 7.6% が例外アクセントであると指摘されている。例外アクセントについては、例えば音節頭にある *nähili* 「どんな」や第 2 音節にある *Ýaponiýa* 「日本」など²、トルクメン語においても確認されている。よって、トルクメン語も音韻論的に無アクセントだとは言えない。トルクメン語のイントネーションについては、これまでの研究において記述が進んでおらず、詳

*本研究は、JSPS 科研費、JP23520472、JP26370458、JP17K02690 の助成を受けたものである。

†大東文化大学外国語学部

¹ 福盛 (2010) において、トルコ語は高さアクセント体系で、語末のストレスはアクセント指定ではないことが示されており、この説の方が適切だと考えているが、本稿ではトルコ諸語全般に対する従來說が適切であるかを検証するために、あえてこちらを示した。

² これらはトルコ語と同じである。*násil* 「どんな」、*Japónya* 「日本」。

細な説明がなされていない。こういった現状をふまえて、本稿では竹内・福盛 (2012) に採録された音声を記述することを目的とする。

2 記述方針

調査は竹内和夫氏が 1978 年に行なっており、録音音声は Murādoṽ Aman 氏 (1946 年生、言語形成地: Aşgabat、男性) である。音調については、以下の方針で示す。アクセントについては、高くなっている音節に対し **H** あるいは **M** (**H** ほど高くなっている³) を付与する。イントネーションについては、上昇調は **R** (1 音節内での上昇) あるいは **LH** (2 音節にわたる上昇)、急下降調は **F** あるいは **HL** を付与する。図については、Multi-speech3700 を用いて広帯域スペクトログラムと基本周波数曲線を重ね書きしている。横軸が時間長、縦軸が周波数 (0~350Hz) を示している⁴。

トルコ語の文字と音声の概要については、以下のとおりである。

a[a~ɑ], b, c[ç], d, e[e~ɛ], ä[æ~ɛ:], f, g[g~g~y], h[x~χ], i, j[ç], ž[ʒ], k[k~q~x], l, m, n, ñ[ɲ], o, ö[ø], p, r, s[θ], ş[ʃ], t, u, ü[y~y], w, y[i~ij], ý[j], z[ð]

母音については、長短の区別がある。正書法では長母音は明記されないが、本稿ではグロス⁵において長母音を ā のように明示している。

トルクメン語は、他のトルコ諸語と同様に母音調和がある。前舌母音群に e, ä, i, ö, ü が属し、後舌母音群に a, y, o, u が属する。母音調和は接辞調和であり、語幹末の母音群に従って、e(ä)~a, i, ü~y, u の交替形⁶がある。

文頭の番号については、上 2 桁は竹内・福盛 (2012) における課を示し、下 2 桁は本文で示された文の順番に従った数を示している。

³ **H** が強調型上昇調 (曲線上昇ではなく、段位が上がるといった上昇) で実現することが多いのに対し、**M** は基本周波数曲線で積極的な上昇は観察できないが、聴覚的には聞こえる。それは、自然下降より下降の傾きが小さい、句境界での下降に対しての相対的な高さであるからである。

⁴ 周波数の数値については、まだ考察に至らぬ点があるため、本稿では記載しないことにする。

⁵ グロスの文法に関する説明は、福盛・竹内 (2011) を参照のこと。

⁶ 狭母音群は円唇調和が関わる時には 4 交替形となり、ü~u があらわれる。関わらない時は i~y のみとなり、2 交替形となる。

3 記述

本節では、複合語、平叙文 (動詞述語、名詞述語、bar 述語)、命令文、助動詞、対句に関するイントネーションを示していく。

3.1 複合語

複合語については、第〇課という言い方を例に挙げる。複合語のアクセントについては、福盛 (2010)では前項と後項の間に下がり目が入る生産的アクセントである。結果として、前項の末尾が高くなる。トルクメン語についても、この規則に準ずるものとなっている。

0103	Birinji gönükme bir-inji gönükme 1-序数 課 第 1 課	1101	On birinji gönükme ōn bir-inji gömükme 10 1-序数 課 第 11 課
0701	Ýedinji gönükme ýedi-nji gönükme 7-序数 課 第 7 課	0401	Dördünji gönükme dört-ünji gönükme 4-序数 課 第 4 課

0103 は、例外アクセントの基本的なものであり、前項の末尾が高くなっている。1101 は、on bir が複合語であり on が高いのだが、gönükme が後続することによって、on birinji が前項、gönükme が後項となる。その結果、on birinji という前項の末尾が高くなっている。0701 は、前項末尾だけでなく後項頭部も高くなっている。これはゆれによるものだと判断できるが、少数派である。0401 については、後項末尾に上昇調があらわれている。これは後述するが、次の文に続ける際に出てくるイントネーションであり、アクセントによるものではない。

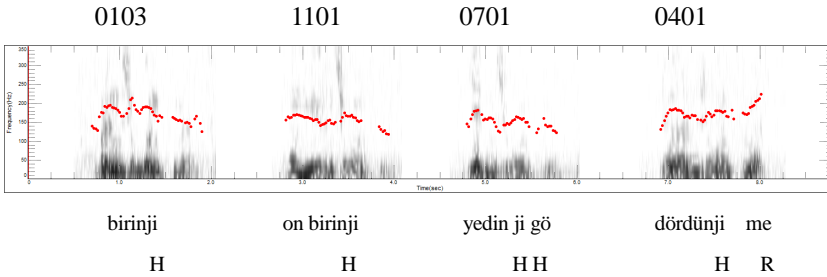


図 1：複合語の音調
(gönükme については一部省略して表記している)

3.2 平叙文

3.2.1 動詞述語

0804 Gar ýagýar.

gār ýag-ýār

雪 降る-現在

雪が降っている。

0805 Çagalar boş wagt lary gar togalap oýnaýarlar.

çāga-lar boş wagt-lar-y gār togala-p oýna-ýar-lar

子-複数 空き 時間-複数-限定 雪 ころがす-連用 遊ぶ-現在-複数

子どもたちはあき時間に雪をころがして遊んでいる。

0804

0805

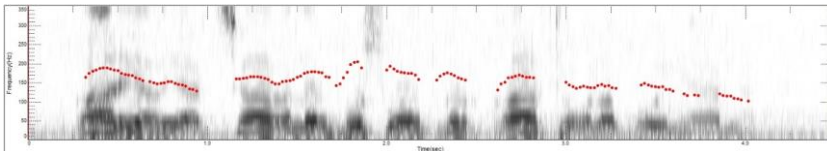


図 2-1：動詞述語の基本的な音調

動詞述語については、動詞語幹の語頭がやや強めに発音される。これをストレスと呼ぶか否かについては、他の様々な要因から判断しなければならないので、現時点では保留とする。0805 における、boş wagtлары は複合語となっており、前項末尾の boş が高くなる。ただし、wagtлары の末尾も高くなっている。この点は、語末の特徴についてはアクセントではなく、語声調によるものと考えている。通常は語末以外に高さがあれば消えるのだが、しばしばあらわれることがあるということは、トルコ語においても観察されている。

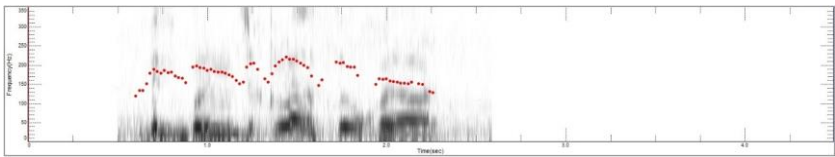
1304 Biz birinji klasda okaýarys.

biz bir-inji klas-da oka-ýar-ys.

私たち 1-序数 学年-位格 学ぶ-現在-1 複

私たちは1年生で勉強している。

1304



biz bi rin ji klas da okaýarys

H H H

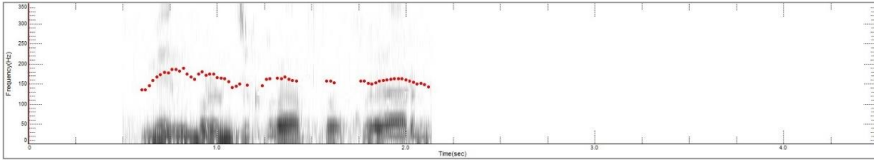
図 2-2：動詞述語で動詞語幹の語頭が強くない例

動詞語幹の語頭がやや強めに発音されるのが多数であったが、1304 のように動詞語幹が強めに発音されない例や、1505 のように動詞句末尾が高くなる例といったようなゆれがみられた⁷。klas については、アクセントにゆれがみられた。1505 では klasda の末尾にアクセントがあるが、1304 では語彙的アクセントとして klas にアクセントがある。これらの要因については、今後の調査に委ねたい。

⁷ 福盛 (2007)では、トルコ語の動詞句は語彙的アクセントによる例外アクセントがなければ自然下降調に従う旨が示されている。なお、トルコ語では語頭の強さはない。

- 1505 Men birinji klasda okaýaryn.
 men bir-inji klas-da oka-yar-yn
 私 1-序数 学年-位格 学ぶ-現在-1 単数
 私は 1 年生で勉強している。

1505



men birinji klas da okaýaryn
 H M M M

図 2-3：動詞述語で動詞句末尾が強くなる例

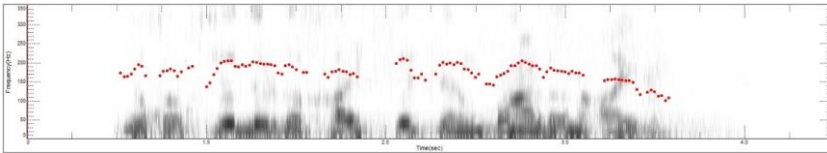
3.2.2 名詞述語

名詞述語においては、動詞述語とは異なり語頭が強く高く発音されることはない。

- 1503 Meniň adym Sadap.
 meniň āt-ym Sādap
 私の 名前-1 単 サーダプ
 私の名前はサーダプです。
- 1504 Kakamyň ady Myrat.
 kaka-m-yň ād-y Myrāt
 父-1 単-属格 名前-限定 ムラート
 私の父の名前はムラートです。

- 0108 Ýokar sözlerde haýsy sesleriň bardygyny aýdyň.
 ýokar söz-ler-de haýsy ses-ler-iň bar-dyk-y-ny
 上 単語-複数-位格 どんな 音-複数-属格 ある-連体-限定-対格
 aýt-yň
 言う-命令
 上の単語にどんな音があるのか答えなさい。

0108



ýo kar söz ler de haýsy ses ler iň bardy gyny aý dyň

M M M M H L

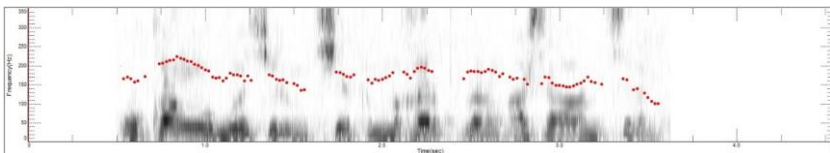
図 5-1 : 命令文の基本的な音調

göçürin 「書き写す-命令」において基本的には 1702 のように語頭が H となるのだが、0402 のように第 2 音節に H があらわれた例を示しておく。竹内・福盛 (2012) のもととなるのは、トルクメニスタンで小学校 1 年生用に使われている教科書『Türkmen dili』であり、「言いなさい」「読みなさい」「書きなさい」のような命令形は頻繁にあらわれる。göçür-は「書き写す」という意味で、テキスト中によく出てくる表現である。確認した範囲では 0402 のみが第 2 音節が強くなっていた。よって、例外アクセントとしての語彙アクセントがあるとは考えがたく、これはゆれではなく言い誤りではないかと推測する。なお、haýsy は疑問詞であり、疑問詞は語彙的アクセントとして語頭にアクセントがある。

また、0402 と 1702 のように okaň という命令形に we という接続詞が後続する場合は、動詞語幹の語頭は強くならず、動詞句末尾が高くなる。

1702 Okaň we göçür-iň, çekimli harplaryň aşagyňy çyzyň.
 oka-ň we göçür-iň, çekimli harp-lar-yň aşäk-y-ny
 読む-命令 と 移す-命令 母音 文字-複数-属格 下-限定-対格
 çyz-yň
 線を引く-命令
 読んで書き写しなさい。母音字の下に線を引きなさい。

1702

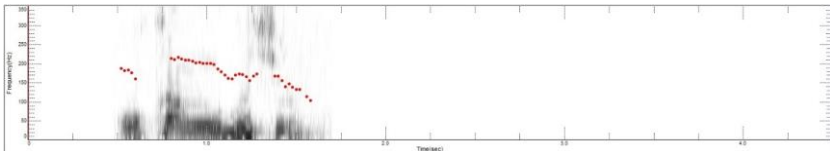


o kaň we gö çür-iň, çe kim li harp laryň aša gyny çyzyň
 H H H M M HL

図 5-2 : 命令形が接続詞に続く例

0402 Okaň we göçür-iň.
 oka-ň we göçür-iň
 読む-命令 と 移す-命令
 読んで書き写しなさい。

0402



o kaň we gö çür-iň
 H H

図 5-3 : 命令形 göçür-iň の第 2 音節が高くなっている例

3.4 助動詞

ここで言う助動詞は、動詞の連用形に後続して、前項動詞の補助的な意味を付与する働きがあり、動詞語幹を基にしている。よって、日本語文法では補助動詞と呼ばれるものに相当する。0304 は授与の用法である *ber-* の例であるが、基本的には前項の動詞語幹の語頭と助動詞の語頭が共に強く聞こえ、高くなる。*nāçe* は疑問詞であり、語頭が高くなる。また、*nāçe ses* は複合語アクセント規則が適用され、*ses* は高くない。

0304 her birinde nāçe ses bardygyny aýdyp beriň.

her bir-in-de nāçe ses bār-dyk-y-ny

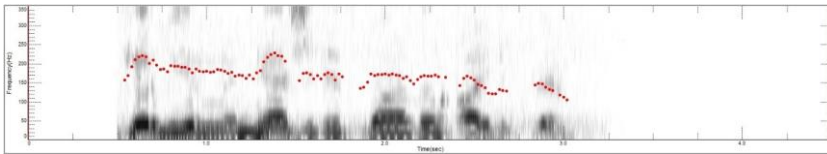
それぞれの 1-限定-位格 いくつの 音 ある-連体-限定-対格

aýt-yp ber-iň

言う-連用 与える-命令

1 単語それぞれにいくつの音があるか教えてください。

0304



her bi rin de nā çe ses b ar dyny aýdyp beriň

H M H M H HL

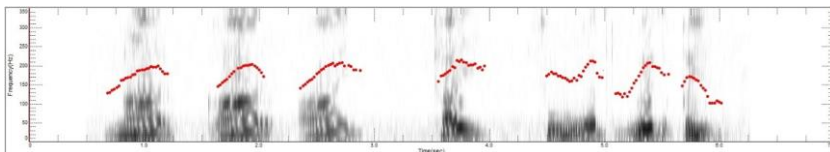
図 6 : 助動詞の基本的な音調

3.5 対句

単語を並べて発音する際には、単語ごとに語末が上昇調となり、最後に急下降調となる。よって、語彙調査の際に、単語単独で 2 回ずつ読みあげてもらおうと、最初の語は上昇調、最後の語は下降調となる。0303 は単語を連続して発音しており、最後の *gyz* までは上昇調となっている。

0303 Nar, gar, aý, taý, surat, göz, gyz.
 nār gār āy taý sūrat göz gýz
 ザクロ 雪 月 子馬 絵 目 娘

0303



nar gar aý taý su rat göz gyz
 R R R R L H R F

図 7-1：単語単独読みあげの音調

また、詩のような韻文では対句になる際、はじめの節の末尾で上昇する、あるいは最終音節が高くなる。対となる節の末尾は積極的に下降調になる場合 (2204)と、自然下降調に任せる場合 (2205)がある。トルコ語においては、福盛 (2011)でなぞなぞの音調を示した。そこでは、前半の節での末尾の上昇調、後半の節末尾での下降調は顕著にあらわれたが、今回用いた音声では必ずしもあらわれるわけではなかった。

2204 Güller açyk, Ýollar açyk.
 gül-ler açyk ýöl-lar açyk
 花-複数 開いている 道-複数 開いている
 花咲き、道拓き。

2205 Dünýä ýaly, Çöller açyk.
 dünýä ýaly çöl-ler açyk
 世界 ように 荒野-複数 開いている
 世界のように、荒野は広がる。

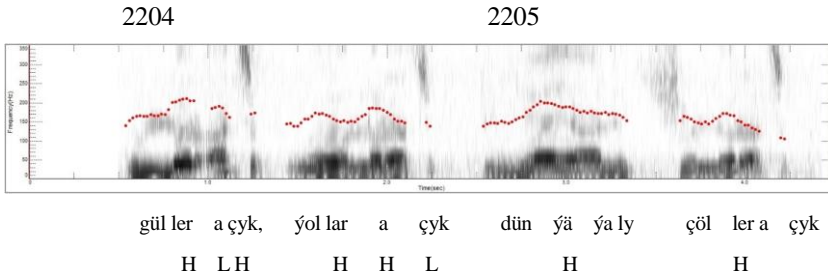


図 7-2：詩における対句の音調

ýaly は後置詞であり、後置詞が後続する場合は前項となる *dünýä* の末尾が高くなり、後置詞 *ýaly* の末尾は高くない⁸。

4 結語

本稿で得られた音調の特徴を以下にまとめる。

- (1) 基本的に語末は高くなる。語末が高くない例外アクセントは、語彙的アクセントとして語頭以外が高くなり、基本的に語末の語声調はあらわれない。
- (2) 複合語の場合、基本的に前項の末尾が高くなり、後項の末尾は高くない。
- (3) 動詞述語は、平叙文、命令文共に動詞語幹の語頭が強く発音され、高くなる。
- (4) 名詞述語は、自然下降調に従う。
- (5) 連用形に助動詞が後続すると、前項および後項の語頭が強く発音され、高くなる。

⁸ 福盛 (2010)では、トルコ語の後置詞は語頭の直前に下がり目がある例外アクセントとし、結果として前項末尾が高くなるとしている。また、福盛 (2009)において、トルコ語の後置詞の末尾は基本的に高くないが、句の末尾で高くなる句音調の影響で高くなるという例を示している。

- (6) 対句となる場合、基本的に前節末尾が上昇調、後節末尾が下降調になる。
- (7) 後置詞は、前項となる名詞の末尾が高くなり、後項となる後置詞の末尾は高くない。

トルクメン語のアクセント体系が強さアクセントであるか否かについて、ならびにイントネーションの全体像については、今後精査を加える必要がある。トルクメン語の音声研究については、一部の現象にのみ焦点をあてて理論研究を進める段階ではなく、まだボトムアップ的な記述を積み重ねる段階だと言える。今後の課題は多い。

【参考文献】

- Demircan, Ömer (1975) Türk dilinde vurgusu: Sözcük vurgusu. *Türk Dili* 284: 333-339.
- 福盛貴弘 (2007) 「7.イントネーション」東京外国語大学言語モジュールトルコ語発音モジュール理論編
- 福盛貴弘 (2009) 「トルコ語の後置詞アクセント小考 —後置詞 *gibi* における音響音声学的パイロットスタディ—」『言語学論叢: 城生百太郎教授退職記念論文集』61-74.
- 福盛貴弘 (2010) 「トルコ語のアクセントについて」『言語研究』137: 41-63.
- 福盛貴弘 (2011) 「トルコ語のなぞなぞの音声分析」『一般言語学論叢』14: 1-39.
- 福盛貴弘 (2013) 「トルコ語の接続詞のアクセント」『北海道言語文化研究』11: 63-75.
- 福盛貴弘・竹内和夫 (2011) 「トルクメン語接辞集」『一般言語学論叢』14: 91-120.
- Inkelas, Sharon (1999) Exceptional stress-attracting suffixes in Turkish: Representations versus the grammar. In: René Kager, Harry van der Hulst and Wim Zonneveld (eds.) *The prosody-morphology interface*, 134-187. Cambridge: Cambridge University Press.

Sezer, Engin (1981) On non-final stress in Turkish. *Journal of Turkish Studies* 5: 61-69.

竹内和夫 (1996) 『トルコ語辞典：改訂増補版』東京：大学書林

竹内和夫・福盛貴弘 (2012) 『トルクメン語入門—キリル文字編—』東京：大東文化大学日本語学科福盛研究室

A sketch on pitch in Turkmen

Takahiro FUKUMORI

This paper describes pitch in Turkmen. The main features are as follows. (1) The beginning word of verb predicate is pronounced higher. (2) The noun predicate is pronounced non-rising. (3) The beginning word of auxiliary verb is pronounced higher. (4) In the couplet, the final syllable of previous clause is pronounced rising, after clause is pronounced falling.

Faculty of Foreign Languages

Daito Bunka University

1-9-1 Takashimadaira, Itabashi, Tokyo 175-8571, Japan

E-mail: ICG01649@nifty.com